ヤクザと詐欺師

詐欺師のスティグマ　4

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18276123

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, テル霊, 無理矢理

ヤクザと元愛人パロ、テルのターンです。絶倫の若人の相手ばっかりさせられて可哀想な師匠です可愛いハァハァ
……全て失踪した師匠が悪い、のかもしれません。

詐欺師のスティグマ　4

次の日は輝気が霊幻の見張り兼、拷問に来た。
「次から次へと……何人がヤクザになってんだ？師匠としてアタマ痛ぇよ、俺は」
「影山くんに引きずられる形で、芹沢さんと僕、弟くんとショウくんが今は組に居ますよ」
（……実力者勢揃いじゃねーか）
霊幻はたらりと汗を流す。厄介なことになっている、と。
「あ、そうだ。退屈だろうと思って、スマホ持ってきましたよ。通信ログは全部監視してますが、一日中ぼんやりしてるよりはいいでしょう」
「おっ、気が効くなぁ〜！さんきゅ……って」
目の前に置かれたスマホに、ミトン包帯の手では電源を入れることしかできない。
「この手じゃ……ちょっと……」
「あっすみません、うっかりしてました」
大袈裟に輝気は驚いてみせる。わざとだ。
「ではこちらをどうぞ、パソコンです」
「お〜これなら映画も見やすい……ってオイ！これもこの手じゃ操作できないじゃねーか！」
「ああ、すみません」
どこか笑いを隠し切れない顔で、輝気が頭を下げる。
明るい髪が、サラっと流れた。
「……どうしてもね、あなたを困らせたくて仕方ないんですよ、霊幻さん。あなたのおかげで、僕は──いや僕たちは、散々な目にあった」
「……へぇ」
どさっと輝気はソファーに座る。スマホやパソコンを浮かせてくるくると回し、もてあそんだ。
「成りたく無かったんですよ、ヤクザになんて。でも仕方なかった。影山くんを少しでも止める必要があったから」

「……モブを？」
「ここ数日驚くほど落ち着いていますけど、影山くん、気分で世界を滅ぼしかける勢いだったんですよ」
霊幻は目を見開く。
そこまで茂夫が情緒不安定になっているとは思わなかった。
「ヤクザに入るまではただのウツ状態でしたけど、組に入ってからはタガが外れちゃって。影山くんは、暴力を気軽に利用するようになりました。超能力者が暴力を肯定することがどれだけ危険か、あなたには分かるはずだ」
ふむ、と霊幻はミトン包帯で唇をむにっと触った。
「僕にだって大事なものはある。家族だったり、友人だったり。お気に入りの店だったり、小さい頃遊んだ場所だったり。──でも昨日までの影山くんは、そういうものを根こそぎ壊しかねない状態だった」
「おぉ……マジか。そうは見えなかったが」
「──だから僕らで止めてたんです。時にはカラメテも使ってね。でも、こんなにあっさり」
目元を抑えてくっ、と輝気は笑う。
「こんなにあっさり、大人しくなってくれるなんて──」
怒気に血走る目を隠していた。
「あんたさえ居なくならなきゃ、こんなことにはならなかったんだ──！！」
ガタガタガタガタ、と部屋中の物が振動する。
「それで？テル、お前も腹いせレイプすんのか？」
ぎっ、と動じず椅子にもたれながら、霊幻が返す。
「なんだよその態度……！ああそうさ！マワされて汚されて、エクボに嫌われればいい！！」
「その程度でエクボは俺のこと嫌いにはなんねーよ」
「……ッ！」
ぶわ、と浮き上がった霊幻の身体が、ソファーに叩きつけられる。
みちみちみち。霊幻の服の中で、無理矢理身体の中が超能力で拡張されていた。
「何故そんなにヒトを信じられるんだ……僕たちの信頼はあんなに

簡単に裏切ったくせに……！」
「いやエクボの場合は……まぁいいや、悪かったよ……な、こんなのやめようぜ？」
輝気の空鞭で霊幻の服が切り裂かれていく。
「やめない」
端正な顔の目が狂気に見開かれ、イケメンを台無しにしていた。

※※※※※

ゆすぶられて、何度内部に吐き出されただろうか。
霊幻自身も幾度となくメスイキして、顔がだらしなくトロけるのを防げなくなってきていた。
「エクボのじゃなくても気持ちいいんですか？」
座位でゆさぶりながら輝気が訊く。
「いいことを教えてやろう。女と違い男の体にはだな、強制的に快感を感じる部位が──ぁ、ぁあっ、おい、話はぁっ、さいご、までっ、」
ずっ、ずっ、と白く泡立てながら抽挿を繰り返して、輝気はその『強制的に快感を感じる部位』を穿った。
「別にいいことじゃなかったので」
「っ、そ、そー、かよ」
何度も抱かれて、白い霊幻の肌が薄桃色に染まっている。
「こんな姿、想像もしなかった、な……」
手の中に影山くんの師匠がいる。

ド　ク　ン

そんなことを思った瞬間、輝気の胸が早鐘を打ちはじめた。

（これはただの優越感）
「ぁっ、ちょっと、はげしっ……！」
（これはただの征服欲）
「あァ……っ、イキ……っ！！」

目の前でぴくんと霊幻が震えるのを見て、輝気もまた絶頂する。
（この人で何度も勃つ理由なんて、考えちゃいけない）
輝気にとって霊幻は。
茂夫の師匠で。
ちょっとした知り合いで。

……自分の超能力のことを知りながらも、自分を守ろうとしてくれた、唯一の人だった。

※※※※※

部屋に何重にも張られたバリアを確認しながら、輝気はニセの霊とか相談所を出る。
茂夫の部屋を横切り、マンションの廊下に出て、集会所となっているホールを目指した。
「拷問お疲れ様。何か聞き出せた？」
ホールに置かれた1人掛けのソファに腰掛けた茂夫が、輝気に声をかける。
「いや、有益なことは何も。役に立てなくてすまないね」
「別にいいよ。師匠に打ちのめされてないだけマシだから」
実は、結構な精神的ダメージは受けてしまっているが、輝気は何も言わなかった。
ヤクザすら震え上がらせる未確認地雷みたいな茂夫が、これだけ穏やかなのをあえて刺激したくは無かったからだ。
「でも兄さん。拷問なら1人いればいいんじゃない？超能力者がほぼ全員待機してる必要はないんじゃ……」
聞きたくない喘ぎ声だの水音だのまで聞かされる羽目になるし。と言うのは律もやめておく。律も茂夫を極力刺激したくなかった。
「律。あのね、これだけは警戒しておかなければならない事があるんだ。それはね……」
さっと全員の顔に青みが走る。
それだけは。
それだけは、避けねばならなかった。

「……そうだね兄さん。確かに全員いた方がいい」

続